

ヨハネス・フェルメールへの慕情

——一九五三年、ブルースト著『失われた時を求めて』における
最初の出会いから——

上原 和



図1 ヨハネス・フェルメール〈手紙を読む青衣の女〉

1 フェルメールの様々な呼び名

——ブルースト『失われた時を求めて』
めて『「スワンの恋」のなかで——

昭和二十八年（一九五三）三月、暮に二八才を迎えた私は、マルセル・ブルーストの訳書『失われた時を求めて』第一巻「スワンの恋Ⅰ(1)」(淀野隆三・井上究一郎訳、新潮社、昭和二十八年三月十日刊)の中で、はじめてヴェル・メール・デ・デルフトの名に出会った。

女主人公のスワンが、これまでもしばしばと訪ねてきていた男友達で学者のオデット・ド・クレシを自宅にお茶を誘ったときの、

「すると彼は、いまちよつと仕事に追われていますので、とヴェル・メール・デ・デルフトに関する、実は数年前からほつぱりだしている研究を楯にとつた」

という件に見られた。

このオデット・ド・クレシの断りの返事の中に出てくる、ヴェル・メール・デ・デルフトの名にふと眼をとめたのは、じつは訳者の註に（オランダの画家、一六三二—一六七五）と記入されていたからである。この人物が、他ならぬオランダの十七世紀における大航海時代の画家であることに、私は興味をおぼえた。

それというのも、私は少年の頃から、大航海時代のオランダに深い憧憬を抱いてきたからである。台湾生れの私は、少年時代を近松門左衛門作の『國性爺合戦』でよく知られている、明の遺臣鄭成功によって開かれた古都台南で過したが、市内から西へ運河に沿って行くと、台湾海峡に面した安平の港があり、港の高台に鄭成功の支配より早い一六二四年（寛永元年）にオランダ海軍によって築かれた

ゼーランジャ城の城址があつた。いまもなお忘れられないのは、中学の二年生のときに東洋史の前嶋信次先生（戦後慶大教授、イスラム文化研究の権威、一九八三年逝去、七八才）に引率されて安平に行き、ゼーランジャ城址に立つて、オランダ人の長官スイツと日本の朱印船の浜田彌兵衛との争いなど、大航海時代のオランダの人の平戸や長崎、そして安平への進出をめぐる興味深い話を拝聴したことである。夢多き日の少年にとって、オランダは遙かなる憧憬の地であつた。

いま、私の手許には、在りし日のゼーランジャ城の俯瞰図（図2）が残されている。手前には安平港の全景が描かれており、平らな島の真中には、幾重にも煉瓦の城壁をめぐらした横長いゼーランジャ城が見られ、城塞の右手から遙かな陸地へ延ている長い砂洲に囲まれた入江には、オランダ船と思われる帆船が幾隻も停泊していた。

ちなみに、後年になって読んだ『バタヴィア城日記』（平凡社東洋文庫版、昭和四五年刊）の岩生成一の序文よれば、大航海時代のオランダは、アジア各地に進出する中心拠点を今日のインドネシアの首都ジャカルタに置き、バタヴィアと命名し、北は日本や台湾から東南アジア各地、

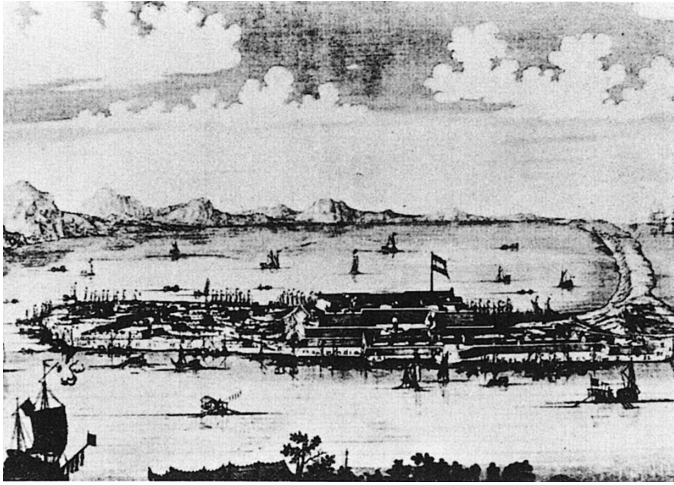


図2 ゼーランジャ城鳥瞰図 本図は、完成したゼーランジャ城を手前の島から鳥瞰したもので、港には船舶輻湊し、入江のむこうにはサッカム(赤嵌)がみられる。(村上直次郎「ゼーランジャ築城史話」1930、所収)

さらにビルマ、インド、ペルシア、アラビアなど中近東諸国に散在する多数の貿易港に要塞や商館を設けたという。

2 〈デルフトの風景〉の前で倒れた

ベルゴット

—— 黄色い小さな壁のマチエールに

魅せられて ——

続いて一年後の昭和二十九年五月に刊行された、『失われた時を求めて』第五巻の「囚われの女Ⅱ」(伊吹武彦訳)の第一章のなかに、すでに第一巻の「スワンの恋Ⅰ」に登場していた人気作家のベルゴットの死について、次のような記述が見られる。なお、この巻では、第一巻のヴェル・メールがフェル・メールと記載されていた。

「彼がなくなった事情はこうである。かなり軽微な尿毒症の発作のために彼は安静を命ぜられていた。ところがある批評家が、フェル・メールの『デルフト風景』(これはオランダ美術館展のためにハーグ博物館から出品されたものであったが)、ベルゴットが大好きで、よく知っているつもりだったその絵のなかに、黄色の小さな壁(彼には覚

えながない)がじつによく書けていて、これを貴重な中國の美術品のように、それだけ切り離して眺めても、十二分に美しいと書いているので、ベルゴットはじゃがいもを少々食べて出かけ、展示会場にはいった。階段をまず、二、三段のぼると目まいがした。いろんな絵の前を通ったが、ヴェネチアの宮殿や、それどころか海べに建っているただの人家に吹きこむ風、射し入る陽の光ほどの値うちもない、わざとらしい芸術の味気なさ、無用さの感じをうけた。やっとフェル・メールの絵の前に来た。およそ知っているどの絵よりもはなやかで風変りな絵であることをおぼえている。しかし彼は批評家の記事のおかげで、はじめて青い服を着た小さな人物が何人かいること、砂が薔薇色をしていることに気がつき、最後に黄色いほんの小さな壁のみごとなマチエールに注目した。目まいがひどくなつてゆく。彼は子供が黄色い蝶をつかまえようとするときにように、みごとに小さな壁面にじっと見入っている。「俺はこんなふうを書くべきだった。近ごろの作品は無味乾燥だ。上から上へいくつも絵具を塗るかさね、俺の文章の一句一句を立派なものにすべきだった。この黄色い小さな壁のように」。しかし目まいのひどさを彼はちゃんと意識していた。彼の

目には天の秤はかりに、自分の生命が一方の皿にのつているのが見えた。もう一つの皿には黄色のみごとにかかれた小さな壁がのつている。彼は小さな壁のために無謀にもいのちを犠牲にしたことを感じていた。「しかし俺は夕刊のために、この展覧会の雑報記事にはなりたくないな」。彼は心に練りかえした。「庇のある黄色い小さな壁、黄色い小さな壁」練りかえしているうちに、彼は円型の腰掛に倒れかかった。そのとたん、彼は生命が危険に瀕しているとは考えなくなつた。楽観的な気持にかえつて「あのじゃがいもが、煮えが悪かつたので消化不良がおこつただけだ。なんでもない」。第二に発作が彼を打ちのめした。長椅子から床へころげ落ちると、見物人や番人たちがみんな駆けつけた。彼はもう死んでいた。

ちなみに、この巻の記者伊吹武彦氏の「あとがき」によれば、一九二一年(死の前年)ブルーストは友人ヴォードワイエに送つた手紙の中で「僕は今朝、フェル・メールとアングルを見に行こうと思つて床につくのをやめた。まるで死人のような僕を連れていってはいくれまいか。そして君の腕によりかからせてはくれまいか」と。ブルーストは展覧会場へ行ったが、中で気分がわるくなり、これはじゃが

いもがこれないためだと考えた。この出来事そのまま「ベルゴットの死」の一節に取り入れられることとなったのである、という。この原稿を手渡すころ、すでに病が篤あつかったのである。ブルーストが逝去したのは一九二二年十一月十八日であった。

3 〈デルフトの風景〉の前に立つ

——一九六五年の夏、マウリッツハイ
ス美術館を訪ねて——

ブルーストの『失われた時を求めて』の第五巻「囚われの女Ⅱ」のなかで、作家のベルゴットが不治の病いにもかかわらず、パリで催された美術展に出かけ、フェル・メールの〈デルフトの風景〉の前に倒れたくだりを読んだのは、ブルーストの訳書が刊行されてから二年目のことであるが、いつの日にか私も思っていた私が、オランダのデン・ハーグにあるマウリッツハイスの美術館で、念願の〈デルフトの風景〉の前に立つことができたのは、十二年後の昭和四十年（一九六五）の夏であった。

当時成城大学の文藝学部で美学・美術史を講じていた私

は、学生部長の勧めもあって、西洋演劇史を担当していた同僚の、いまは亡き木檜禎夫とともに、夏休みに十数名の学生を引率して、カイロを起点にして、アテネからヨーロッパ各地をめぐり歩いた際に、念願のマウリッツハイス美術館の訪問を旅程に加えたのである。

八月七日の午後、私たちのバスはマウリッツハイス美術館に到着した。早速〈デルフトの風景〉の前に立つと、『失われた時を求めて』の訳書のなかでさまざまに呼ばれてきたフェルメールの名が、ヨハネス・フェルメール (Johannes Vermeer 1632-1675) と明記されていた。

私は感動をおさえながら、パリで開催されたオランダ美術展で〈デルフトの風景〉の黄色い小さな壁のマチエールに注目したベルゴットのように、些細な点まで見逃すまいと自分を勵まさずにはいられなかった。〈デルフトの風景〉の前に身を寄せて、すぐに気がついたことは、光と影、明と暗の対照であった。横長い画面の三分の二近くを空が占よっていたが、その広い大空も、曇った暗い雲と明るい白い雲、また雲の左右の青い空も濃い青空と淡い色の青空とに描き分けられていた。運河の対岸の手前に並んでいる煉瓦造りの建物も、水門を挟んで左右では壁にも青い屋根にも



図2 ヨハネス・フェルメール〈デルフトの風景〉(マウリッツハイス美術館蔵)

濃淡の対照があり、さらにその後方の赤い屋根も右側は太陽の光に照らされて明るく、水門の後方の左側は濃い煉瓦色の屋根が続いていた。

また建物の手前の運河も、建物の影にも、水の色にも、また繁留されている帆を下した船にもその影にも、運河の流れにも、空の明暗を映していた。さらに静かに流れている運河と、手前の黄色い砂地の岸にも、動と静の対照が見られた。ボートを繫留^{けいりゅう}している数人の男女の人物のいる左手から右手へ斜めに描かれていたが、沿岸の線には動きが感じられ、また向き合っている白いスカートを被った婦人二人からは、話し合う声が聴えてくる。私は容易には、絵の前から離れることが出来なかった。

このあと私は美術館のなかで、思いがけなく、もう一つのヨハネス・フェルメールの作品〈少女の頭〉に出会った。後年、この異色の名作は〈青いターバンの少女〉、さらに〈真珠の耳飾りの少女〉の名で知られるようになるが、この肖像画風の作品には、大膽な明暗の対照が見られた。金色の幅の広い額縁の内側に、全面真っ黒に塗られた壁面を背景にして、一人の少女の左向きの上半身が、画面いっばいに描かれていた。



図3 ヨハネス・フェルメール〈少女の頭〉(マウリッツハイス美術館蔵)

ピンク色の明るい顔だけを正面に向けた少女の顔には、額の上に異國風の青い色の幅の広いターバンが巻かれており、頭上の明るい黄色の頭巾からは長い裾が背中らまで垂れ下っていた。ターバンの青い色と頭巾の黄色の対照が、きわめて印象的であった。垂れ下る黄色の頭巾の裾には、淡い青い布が垂れていた。顔や頭巾の明るさに対して、黄色の上衣の背中が暗かったが、大膽なことにその上衣と頸との暗さに対して、眞つ白い內衣の厚い襟が、顔と肩から下を断ち切るように、頸から喉元へ斜めに描かれていた。

その白い襟えりの上の暗い頸もとには、大きな真珠の耳飾りが輝いていた。まさしく〈少女の頭〉の画面の眞ん中にある。

ところで私がいちばん心魅かれてならなかったのは、その少女の横向きの顔の眼と唇であった。両眼は左へ向けられていたが、右の眼よりも左の眼の視点は左下へ向けられていた。動きがあった。眞つ赤な唇は、放心したように開かれ、白い歯並びが見えた。この謎めいた少女の肖像の前から、私はいつまでも立ち去ることができなかった。

4 ヨハネス・フェルメールの青の秘密

——十七世紀に盛行したデルフト

陶器の染付けに倣う——

一九六五年の夏、デルフトを訪ねてから九年後の一九七四年の十一月末、一年間の在外研修のため、四月から中近東とヨーロッパの遺跡と美術館を歴訪していた私は、ロンドンのナシヨナル・ギャラリーでヨハネス・フェルメールの〈ヴァージナルの前に立つ女〉に出会った。

ピアノの前身を思わせる楽器の鍵盤に両手をのばして立

っている、正面に顔を向けた婦人の青い色の肩被いを見て、私は九年前にデルフトのマウリッツハイス美術館で見たヨハネス・フェルメールの《少女の頭》の、少女が頭に巻いていた青いターバンが想い起されて、翌日ロンドンからドーバー海峡を船で渡り、ベルギーのブルージュからオランダのデルフトへ向った。

十二月二日の午後、マウリッツハイス美術館に到着し、万感溢れるおもいでヨハネス・フェルメールの《デルフトの風景》の前に立った。いちばん最初に眼に入ったのは、画面の三分の二近くもある空の色であった。曇った雲と白い雲との間から、明るい青い大空が見え隠れするのが見られた。雲の明暗によって、青い空の色も変化していた。大空に時は静かに流れていく。

続いて、私は《少女の頭》の前へ行った。《ターバンを巻いた少女》と名前が変わっていた。ひそかに恋心すら抱いた少女との九年ぶりの対面であった。横向きの少女の顔の右に寄せられた黒い瞳が私を見詰め、開かれた赤い唇がもの言いたげに見えた。しかし、ひさびさに会っていちばんに心魅かかれてならなかったのは、やはり少女の額の上に巻きつけてある青いターバンであった。ターバンの青は、

額の上では明るく、眞珠を垂している暗い耳たぶの上では、額の上とは対照的に濃い青色をしていた。

帰りに立寄った、《デルフト焼き》が沢山並んでいる美術館の売店で、私は《デルフトの風景》の雲間に見られたような、淡い青空を背景にした風車の染付けが、柄の上に ついてある銀のスプーン二本と、瓢箪のかたちをした、濃い青い色の花模様様が華やかに描かれている一本差しの花瓶とを購めた。

私は、ヨハネス・フェルメールの《デルフトの風景》や《ターバンを巻いた少女》の青が、もともと十七世紀の大航海時代に流行したデルフトの陶器の、中國風の染付けに由来していることを、またフェルメール自身が、若いときに陶器職人の協同組合の長をしていたことを、このときはじめに知った。

ちなみに、デルフト陶器に用いられた深青色のラピス・ラズリ（青金石）の原産地は、アフガニスタン東北部で、紀元前三五〇〇年にはメソポタミアで使われていたという。デルフト陶器の絵付けの「青」には、悠久の夢が宿っている。

5 ヨハネス・フェルメールの〈手紙を
読む青衣の女〉に魅せられる

——一九七四年十二月三日、アム

ステルダム国立美術館にて——

デルフトの旧駅を一六時に発った私は、アムステルダムのホテルに泊り、翌朝早く国立美術館を訪ねた。

じつはアムステルダムには、一九六五年八月にも学生たちと一緒に、ドイツのケルンから直行して一泊しているが、旅行社のガイドの案内で、アムステルダムでは港や運河の景観とともに、フィセント・ファン・ゴッホのオランダ時代の写実的な〈じゃが芋を食べる人々〉など、初期のゴッホの作品を展示している市立美術館や、十七世紀オランダの巨匠レンブラント・ファン・レインが、居住し逝去した家が美術館となっていたので、この二つの美術館の見学ですっかり時間を費やしてしまい、予定していた国立美術館に立寄ることが出来なかった。それというもスケジュールの上で、その日のうちにデルフトまで行き、マウリッツハイス美術館で待望のヨハネス・フェルメールの〈デルフト

の風景〉を観ることになっていたのである。

ようやく九年後のアムステルダムで、私ははじめて国立美術館を訪ねることができた。私は直つ先きにヨハネス・フェルメールの作品のある部屋に直行した。朝早いので部屋の中には、男性の監視員が一人立っているだけで人影はなかった。ふと見ると壁に並んでいるヨハネス・フェルメールの四点の作品の一つが、斜めに傾いていたので、私は壁際まで行き、両手で額縁の傾きを直そうとしたところにわかに警報が鳴り響き、全館内から警備員たちが駆けつけてきた。幸い最初から部屋にいた警備員が、私の背後で一部始終を見ていたので、駆けつけた警備員たちに事情を説明してくれた。私は釈明してくれた警備員にお詫びとお礼を云って、あらためてヨハネス・フェルメールの作品の前に立った。この部屋には、ヨハネス・フェルメールの〈手紙を読む若い女〉、〈恋文こいがみ〉、〈台所の召し使〉、〈小路〉の四点の作品が、壁に掲げられていた。

最初に〈手紙を読む若い女〉の前に立った。この作品は、後年〈手紙を読む青衣の女〉という名でよく知られている。前日にマウリッツハイス美術館で観た〈ターバンを巻いた少女〉と同じように、襟元の白い内着の襟をアクセントに



図4 ヨハネス・フェルメール〈手紙を読む若い女〉(1974.12.3.筆者撮す)

して、青い色のふつくらとした上衣うぶぎを着ているのであるが、上衣の青は、窓に向っている前面と背面とは、まさしくデルフト・ブルーの明暗が見られた。その青い色の上衣と対照的に、青衣の裾に覆われた下裳は、焦茶色こげちやをしており、やはり前と後に明暗が見られた。

手紙を読んでいる真剣な若い女の横顔を見ていると、手紙の文面を追う眼差しと、小声で読んでいるわずかに開かれた唇から、私はすぐには眼を離すことが出来なかつた。若い女が読んでいる手紙は、おそらく海外に出かけている

夫からの久しぶりの音信たよりのように思われた。

海外に夫が在住していることを暗示するかのよう
に、手紙を読んでいる女の右肩の壁に掛っている、オランダ周辺と思われる大きな地図の右下には、湾内に数隻の船舶が見られた。前述したように、十七世紀の大航海時代のオランダは、今日のインドネシアの首都ジャカルタを、彼らの民俗名ちよなに因んでバタヴィアと命名して総督府を置き、周辺の東南アジア諸国はもとより、北は日本まで進出してしたのであった。若い女が読んでいる手紙は、もしかすると平戸や長崎のオランダ商館の夫からの久々の便りであったかも知れないと、空想したくなる。

ところで、この絵の前に立っていちばんに注目したのは、地図の左手の真っ白い壁であった。白い壁の明るさは、手紙を読んでいる青衣の女が、陽光ひかりのさす窓の前に立っていることを示している。地図の下に垂れている軸じくの左端の青い飾り玉の輝きが、壁の白さを際立させていた。その飾り玉の光と影の明暗が印象的であったが、さらに飾り玉の右下の壁に円い翳かげが横に尾を引いて描かれているのにも、その繊細さに感嘆せずにはいられなかつた。さらにこの白い壁は、テーブルの前の椅子の背せ凭たかの濃い青色によって、白

さが強調されていた。それは〈ターバンを巻いた少女〉の黒一色の背景となんと対象的であったことか。

白い壁の下には、濃い青色の布で覆ったテーブルの上に、雑然と書籍や道具箱などを積んだ黒茶色の毛布のようなものが敷かれていたが、手紙を読んでいる婦人の直ぐ手前には、本の脇に眞珠の首飾りが置かれていた。

〈手紙を読む若い女〉に魅せられた私は、午後にもヨハネス・フェルメールの部屋に行き、そのあと十七世紀に製作されたデルフト焼きの並んでいる部屋へ行つて、濃淡のある青い絵付けのある陶器の眞白なかがやきに感嘆した。

私は、翌日の十二月四日も朝早くから國立美術館へ行き、午前中は階下のアジア室で、十七世紀の大航海時代に日本から持ち帰った「南蛮屏風」など、日本・中國・東南アジアからの美術品を見てまわり、昼前にヨハネス・フェルメールの〈手紙を読む若い女〉の前に立ち、別れを惜んだ。万感胸に溢れるおもいであつた。